

古文 説話

## 用光と白波

今 鏡



講師

畠山 俊

理解を深めるために

### ■学習のねらい■

使いの途中で海賊に襲われた用光もちみつですが、海賊から無事に解放されたところか、ほうびまで手にします。その理由を読み取りましょう。また、古文を現代語訳する際の注意点を学びます。

\*

\*

\*

### 用光の気持ちを読み取る

相撲の使いに出た用光は吉備の国のあたりで海賊に襲われます。居住まいを正して海賊を迎えた用光は船の屋形の上で得意であった筆策ひぢりきを演奏しました。海賊に命を取られるのなら、最期にあたって得意なものを心残りなく演奏しようという気持ちがあったのでしょうか。

### 古文を現代語訳するときの注意点

古文ではしばしば「は」「が」「を」などの助詞が省略されます。それらを適切に補うことが重要です。また、主語自体が省略されることも多く、文脈の理解が難しく感じる場合もでてきます。さらに、必要などころに「もの」「こと」「とき」「ところ」などを補うと滑らかな現代語訳になることがあります。

### 白波の行動とその理由を考える

白波（海賊）は用光の演奏する筆策の音を聞くと、ほうびを与えて去って行きました。美しい音楽に感動する心を白波も持ち合わせていたのでしょうか。乱暴者でさえ情けをかけるほどの用光の演奏をめったにないことだとほめるいっぽうで、それに応じて用光を解放した白波をもたえています。



国語総合

第11回

## 用光と白波

講師  
畠山 俊

用光が、相撲の使ひに西の国へ下りけるに、吉備国のほどにて、沖つ白波立ち来て、ここにて命も絶えぬべく見えければ、褐衣、冠などうるはしくして、屋形の上に出でて居りけるに、白波の船漕ぎ寄せければ、その時、用光筆箒取り出だして、うらみたる声に、えならず吹きすましたりければ、白波ども、おのおの悲しみの心おこりて、かづけ物どもをさへして、漕ぎ離れて去りにけりとなむ。

さほどの理もなき武士さへ、情けかくばかり、吹き聞かせけむもありがたく、また昔の白波は、なほかかる情けなむありける。

『今鏡』

### 【現代語訳】

用光が、相撲の使いで西海道の諸国（現在の九州地方）へ下った際に、吉備の国（現在の岡山県と広島県東部）のあたりで、海賊が出て来て、（用光は）ここで命も絶えてしまいそうに思われたので、上着や冠などをきちんと整えて、（船の）屋形の上に出て座っていたところ、海賊の船が（用光の船に）漕ぎ寄せると、そのときに、用光は筆箒（雅楽で用いる縦笛）を取り出して、哀切な音色で、何とも言えないほどすばらしく吹いたので、海賊たちは、それぞれ悲しい心がわき起こって、（用光に）褒美の品々まで渡して、漕ぎ離れて去ったと（いうことだ）。あれほどの道理もわきまえない、海賊でさえも、情けをかけてしまうほど、（用光が筆箒を）吹いて聞かせたとかいうこともめったになく、また昔の海賊は、やはりこのような情けがあったのである。